〈本郷キャンパス〉
学校法人文京学園
文京学院大学経営学部・外国語学部・保健医療技術学部／大学院／文京学院大学生涯学習センター
〒113-8668 東京都文京区向丘1-19-1
☎大 03-3814-1661 生涯 03-5684-4816
文京学院大学文京幼稚園
〒113-0023東京都文京区向丘 2-4-1
☎幼 03-3813-3771
〈ふじみ野キャンパス〉
文京学院大学人間学部・保健医療技術学部／大学院／文京学院大学ふじみ野幼稚園
〒356-8533 埼玉県ふじみ野市亀久保1196
☎大 049-261-6488 幼 049-262-3806
〈駒込キャンパス〉
文京学院大学女子高等学校／文京学院大学女子中学校
〒113-8667 東京都文京区本駒込 6-18-3
☎03-3946-5301

文京学院

平成 30年（2018 年）
8 月 31日
第 742 号
発行
学校法人文京学園
http://bgu.ac.jp

中学 バレーボール部 11年ぶりの全国制覇

今夏の東京都大会を制した中学バレーボール部が関東大会で二連覇を達成、全国大会でも11年ぶり6回目の優勝を果たしました。

島根県松江市で開催された同大会には沢山の保護者、卒業生、教職員が駆けつけて大声援を送り、選手たちの大きな力になりました。

（写真提供＝中学バレー部保護者）

中学バレーボール部は、秋の新人戦、春季大会、夏の選手権大会と東京都の全ての大会での優勝を果たし、関東大会へ駒を進めました。

8年連続28回目の出場となった「第53回関東中学校バレーボール大会」（8月8日～10日／埼玉県）でも快進撃は続き、2年連続11回目の優勝を達成しました。

関東ブロックの第一代表として8年連続25回目の出場を果たした「第48回全日本中学校バレーボール選手権大会」（8月21日～24日）では、予選グループ戦で長崎県の名将が率いる諫早中学校を撃破。続く決勝トーナメントでは準々決勝で優勝候補の一角である大阪国際大和田中学校と対戦、フルセットまでもつれ込む苦しい試合を勝利しました。

その余勢を駆って、大会最終日は準決勝を快勝し、決勝戦へ進出。決勝は予選グループ戦で勝利した諫早中学校が敗者戦から勝ち上がり、まさかの再戦となりましたが、第一セットの大激戦を制し、勢いそのままにストレート勝利での優勝を果たしました。

中学バレーボール部の全国制覇は実に11年ぶりの快挙、6回目の優勝は全国最多の優勝回数となりました。

以下全国大会結果です。

- ●予選グループ戦
  本校 2（25-20、25-21）0 諫早中（長崎）
- ●決勝トーナメント2回戦
  本校 2（25-17、25-13）0 近江兄弟社中（滋賀）
- ●準々決勝
  本校 2（20-25、25-17、25-17）1 大阪国際大和田中（大阪）
- ●準決勝
  本校 2（25-17、25-16）0 福岡女学院中（福岡）
- ●決勝
  本校 2（32-30、25-20）0 諫早中（長崎）

廣田あい（3桃）選手の高さを活かしたアタック　部員全員で全国制覇を達成！

高校 カラーガード部「全国大会」「JAPAN CUP」で優勝！

「全国高等学校ダンスドリル選手権大会2018」が8月1・2日に丸善インテックアリーナ大阪で開催されました。

高校カラーガード部は、トールフラッグ部門にエントリーし、高難度技を取り入れた演技で勝負。ディズニーシリーズ「ズートピア～Try Everything～」の曲に乗って精一杯の演技を行い「1位」を獲得しました。

さらに、8月26日には、武蔵野の森総合スポーツプラザで開催された「JAPAN CUP 2018」のカラーガード部門において、22名のチームワークをフルに発揮し、初の「優勝」を勝ち取りました。

過去4年間、2位の成績で悔しい思いをしてきた同部が、遂に勝ち取った王座。優勝旗と優勝カップに本校の校名が記される感動を、メンバー一同深く心にとめました。

全国ダンスドリル選手権大会「1位」のメンバー

JAPAN CUPで「優勝」を獲得したメンバー

中学 チアダンス部 SUMMER COMPETITIONS 2018

USA School&College Competition 2018 EASTで「第1位」獲得！

8月11日、駒沢オリンピック公園総合運動場体育館において、United Spirit Association（USA）が主催する「サマーコンペティションズ2018スクール＆カレッジ コンペティション　2018イースト」が開催されました。

本校チアダンス部は、中学校編成ソング・ポン部門ノービス・ラージのカテゴリーに出場し、「第1位」を獲得！

顧問の丸山香奈教諭から、次の喜びの声が届きました。「中1が8名、中2が9名、中3が9名の合計26名の中学生部員全員での受賞はとてもうれしいです。9月29日（土）・30日（日）の学園祭で同じ演技を披露しますので、より多くの方にご覧いただければ幸いです」

中学生部員全員の力を結集！
（写真提供＝チアダンス部保護者）

Green Spirits リカレント教育を模索

人間学研究科委員長
人間学部教授
伊藤英夫

今年の猛暑は、生命の危機すら感じられる事態となっている。こんなときこそ、特に大学院生諸君は、図書館にこもって勉学に励んでいることだろう。

人間学研究科の場合、母体となる学部教育の多くが資格や免許を取得して現場に出ることを目指しているため、臨床心理学コースを除くと、大学院進学率はあまり高い方とは言えない。学生たちも、学部教育を終えると期待に胸膨らませて現場に出て行くので、大学院でもう少し勉強してからなどと、悠長なことを考える学生は少ない。受け入れる現場も学部卒で充分という考えが主流であろう。

しかし現場に出て5～6年経つと、自分の勉強の足りなさに気づき、学部の頃にもっと勉強しておけばよかったと後悔する卒業生が多い。ところが、現場に出て仕事をすることで初めて気づくこともあり、学生だった頃に一生懸命勉強したらよいというものでもない。例としてはあまりよいものではないかもしれないが、資格に必要な科目を取りこぼして卒業し、保育助手として働きながら授業を受けに来ていた者がいた。後期の授業だったため、前期働いた経験が生きたようで、学生の頃は全くぴんとこなかったが、こうやって働きながら聞き直してみると、その通りだと実感できたり、なるほどと思ったりして授業がよく理解できたと感想を漏らしていた。

このような卒業生たちに、リカレント教育という位置づけも兼ねた大学院教育について模索している。専門性をさらに高める必要性を感じている卒業生が皆、働きながら大学院に進学して修士論文を書く必要はないかもしれない。しかし、一定の仕事を経験すると、ここの部分をもっと勉強したいと思うようになるだろう。そうしたときは、大学院の科目等履修生の制度を使って、自分のとりたい授業をピンポイントで履修することができる。授業も集中講義として夏休みや土曜日に開講したり、6限に設定するなどの工夫もしている。仕事を早めに切り上げて、ぜひ学びに来てもらいたい。「いつでも勉強したくなったら戻っておいで」という教員たちの言葉を思い出してほしい。

大学 「てっぺんフォーラム」後輩の「気づき」を喚起

本学に入学後、何かが「きっかけ」となって「スイッチ・オン」し、様々な「気づき」の中で見つけた目標に向かい、絶え間ない努力を継続した先輩たち。その成功までの道筋を、熱い想いを込めて1年生に伝える「てっぺんフォーラム」が、ふじみ野キャンパスでは6月30日に、本郷キャンパスでは7月7日に開催されました。

ふじみ野キャンパスでは「期待」「発見」「活力」の副賞も授与されました。本郷キャンパスでは、ふじみ野キャンパス代表ゲストとして、根木苑美さんが発表しました。

ふじみ野キャンパス

スイッチ・オン賞

中村さん

【発見】マジックサークルDCHS中村勇貴（心理学科3年）「他人とは違う何か」

コミュニケーションツールの一つとして、同サークルに所属し、ふじみ野市内のイベントや、介護福祉施設などで技を披露している中村さん。マジックにおいて、他人の真似をすることが自分の技量になっていることに気づき、自分にしかできない演出について考えました。演じることができる人間は、普通の人と同じネタでも、真似ではなく「魅せ方」があることに気づき、「自分にしかできない演出」を加えて自分だけの演技」を編み出しました。その成果としてのマジックを披露すると、会場からは驚きと称賛の声が上がりました。

【活力】邊見海歩（児童発達学科3年）「今しか出来ないこと！」

人とは違うことを求めて、様々な活動に取り組んでいる邊見さんは、「ベット里親会でのボランティア活動」と「チアダンス」に力を注いでいます。前者は、ふじみ野市で親育放棄された犬猫の保護施設を運営し、新たな飼い主が見つかるまで保護する活動です。後者は、「夢で世界は色づいていく!!」をコンセプトに、2014年に立ち上げたエンターテインメントグループで、テレビ番組やホテルでのパフォーマンスを実施。

これらの活動に全力投球している邊見さんは、「大学生になったから出来ることを今のうちに探して、日々全力で！」と1年生に伝えました。

邊見さん

【期待】長谷野優作（臨床検査学科3年）「意識改革するために」

長谷野さんの「スイッチ」が入ったのは、2年次の授業で「人命に関わる臨床検査技師の重要性」について、学習サポーターと話した時でした。癌宣告をされた祖父が、原発巣を探すために沢山の検査を受けた経験から、国立がん研究センター中央病院での臨地実習が決まった長谷野さんは、「患者の負担を減らせるよう迅速で正確な臨床検査技師を目指す」ことを目標に、現在奮闘中です。

1年生には「2年次以降の授業が過密なので、人命に関わる学科であることを意識して、1年次から日々努力を」と伝えました。

長谷野さん

【活力】つりサークルBackrushers川上萌（関理抜学科4年）、遠藤舞美（同）、安野隆史（児童発達学科4年）

3人は、本学で最も新しい「つりサークル」を立ち上げ、ワカサギ・シーバス・シロギス釣りなどを楽しんでいます。

立ち上げのきっかけは、どのサークルも引退する3年生であったこと。川上さんは所属していたサークルを引退し、それと同時に「新しいことに挑戦しよう」と「スイッチ・オン！」

新たな「つりサークル」により、学部を超えて沢山の人との関わりが増えました。また、魚に触れて調理するという経験ができました。目下の課題は「部員の増員」で、部員募集中です。

3名は「文京学院は、やりたい事ができる大学です。新しい事にチャレンジして新しい世界を見る事で、視野も広がり人生感が変わります。新しいことを始めるタイミングは、3年生からでも決して遅くはありません。協力してくれる仲間や先生方は沢山います！」と伝えました。

左から安野さん、川上さん、遠藤さん

【活力】手話サークル あしの会根木苑美（児童発達学科3年）「大学4年間を悔かせるために」

「あしの会」のパフォーマンスに心惹かれ、1年次から同サークルに所属している根木さん。自ら「聴覚障害者との交流会」と、手話を使って生活する子どもたちの「放課後等デイサービス・ボランティア」を始めました。

それらの活動の中で、障害を克服して日々楽しく生きる人々と時間を共にして大きな刺激を受け、自身の活動に喜びとやりがいを見つけています。後輩たちには「夢中になる何かを見つける4年間にしてほしい」と伝えました。

最後にサークルの仲間と共に手話歌を披露すると、1年生はその美しい動きに見入っていました。

根木さん

てっぺん賞

【活力】齋藤美光大（理学療法学科3年）「4年間をどう使う？」

「日本理学療法学生協会（JPTSA）」の関東支部長を務める齋藤さん。全国の理学療法士を目指す学生たちに「情報の発信と発信の場」を提供し、参加者が多くの刺激を受けて「憧れの自分」を見つけ出し、「オンリー1の存在」になってほしいと願って活動中です。

入学時には低迷時期がありましたが、このままではスポーツトレーナーになる夢がかなわないと一念発起。大学内やJPTSAでの学び、インターンなどを自主的に行い、現在の自分があります。「自当に」やりたいことは何ですか？時間をかける価値はありますか？　あなたはこの4年間で何をしたいですか？」と1年生に問いかけました。

齋藤さん

【発見】浦田雅也（外語学部3年）、松本あゆみ（同4年）、津田莉花（児童発達学科3年）「新・文明の旅」

左から浦田さん、津田さん、松本さん

「新・文明の旅」プログラムの派遣生に選抜され、カザフスタン共和国とウズベキスタン共和国を訪れた3名。1年前の英語を通して両国の歴史・文化・経済などについて様々な観点から学び、集大成として自己表現力アップのためのプレゼンテーションに臨みました。その成果をもって、現地でディスカッションや文化交流などを楽しんでいました。

その中で、戦時中に勤勉な日本人に対する信頼が生まれたことを始めとする歴史の重みや、現地の人々のおもてなしから判る温かさについて学びました。1年生には「自分で見て初めて事実が判る。何事にも挑戦することが自分を変える第一歩」と伝えました。

てっぺんフォーラム実行委員会学生委員長 高橋華奈（人間福祉学科3年）

高橋委員長

今年は、ふじみ野キャンパスの講堂での実施だったため、午前は保健医療技術学部4学科と人間学部人間福祉学科、午後は心理学科、児童発達学科、コミュニケーション社会学科の入替え制となりました。初めての経験でしたが、副委員長、募集・広報部会長が積極的に動いてくれて、各委員も臨機応変に対応してくれました。委員会が実際に動き出してからは、昨年の課題であった「委員同士のコミュニケーション不足」もなく、皆さんに助けられて無事に終えられたことを大変うれしく思い、安堵しています。

本郷キャンパス

スイッチ・オン賞

野口さん

野口圭太（保健医療科学研究科2年）「大学院進学への決意と挑戦」

野口さんは、大学院進学を志す3つの動機が「スイッチ・オン」に繋がりました。まずは、微生物実習で細菌の面白さに目覚めたこと。2つ目は、国際学会で活躍する先輩の姿を見たこと。3つ目は、進学により将来の選択肢が増えること。

進学後、野口さんは「腸内細菌による膀胱炎の予防と治療」について研究、国際学会「ICC2017 Taiwan」にも参加して、英語で発表を行いました。これにより、英語での交流の楽しさを知り、最先端の研究に触れることで自身の研究のモチベーションをアップ。世界で活躍できる人材を目指して現在、英語論文にも挑戦。

「目標が見つかるチャンスを逃さないことの大切さ」を伝えました。

左から北村さん、笹原さん

北村優也・笹原響心（外国語学部2年）「GASP合格までの道のり」

留学特待生プログラム（GASP）に合格した2人。スカラシップでのアメリカ交換留学と、中国交換留学の機会を掴みました。難関試験を突破するために北村さんは、「学内にある教材」をフル活用。「大学生は自由に時間を使えるから、やりたいことがあったら、すぐにアクションを」と伝えました。

笹原さんは、1年次に聞いた「てっぺんフォーラム」と「スピーチコンテスト」で、4年生の英語によるスピーチを聴いてスイッチ・オン！　自身も英語スピーチコンテストに出場し、2位を獲得。日々の授業では、レポートは回答枠を超えて更まで書く、1時間以上早く登校して教材で自主学習をするなど、小さな努力を積み重ねました。「行動を習慣化することが大切。少しでも為になることには飛び込んで！」と伝えました。

左から中尾さん、浦田さん

浦田雅也（外国語学部3年）中尾雅人（経営学部3年）「必ずある、変わる瞬間」

ユーラシア大陸の国々の学生たちとの文化交流を通じて、発信力を高める「新・文明の旅」プログラムで派遣生に選抜され、カザフスタン共和国とウズベキスタン共和国を訪れた2人。浦田さんは、1年次に同プログラムの詳細説明の後、現地の人々のおもてなしの素晴らしさを軸に交流体験に触れ、「自分で見て、初めて事実が分かる」と強調。「この経験を伝えていく」「日本と現地を繋ぐ一翼を担う」ことを今後の目標にしたいと話しました。1年生には「今、この瞬間、この大学にいる価値を高めるのは自分」と伝えました。

新井友朗（外国語学部4年）「挑戦することの大切さ」

新井さん

新井さんは、「自分の弱みを克服して成果の残る大きなことをしたい」とスイッチ・オン！ ゼミの仲間と共に「第6回全国学生英語プレゼンテーションコンテスト」入賞を目指し、「規格外野菜を飲食店に繋げる新しい企画を一から考案する」ことをテーマに活動を開始。失敗を重ねながら、農家・飲食店・加工業者など40カ所以上を取材し、8カ月間準備をしました。その結果、641名参加の大会で「TOP50」を獲得。

この活動を通じて得たチームワーク力、社会人力、英語プレゼンテーション力などのスキルが自信に繋がりました。「挑戦によって得た自信が自らの可能性を大きくする！」と伝えました。

てっぺん賞

宮下さん

宮下日菜子（経営学部4年）「大学4年間の軌跡～挫折を乗り越えて得られたもの～」

高校時代に挫折を味わった宮下さんは、「新たな環境で自分を変えたい」と様々なことに挑戦！ 長期フィールドワーク「Anime Japan」の学生実行委員長として1年間、企業と関わりながら「仕事」という認識で活動した結果、「ビジネススキル」「責任感」「周囲の力を高められるリーダーとしての新たな自分の発見」を得ました。

東日本大震災復興支援プロジェクト「ブレーメンズ」では、岩手県釜石市で行われた「根浜グランビア」をプロデュース、子ども向けに「ねば～だるま」制作ワークショップも行いました。

「恐れず挑戦を」「誇れるものを見つけよう」と1年生に伝えました。

吉田委員長

てっぺんフォーラム実行委員会学生委員長 吉田茜（経営学部3年）

1年次から「てっぺんフォーラム」に関わり、今回「大学院進学への決意と挑戦」を伝えました。

大学 保育実践研究センター「公開研究会」で学び深く

活発な意見交換会が行われた公開研究会

保育実践研究センターふらっと文京主催「第14回公開研究会」が6月30日、「子どもの人権を守る～子どもが『子ども』でいられるために～」をテーマに、ふじみ野キャンパスで開かれました。

まず、森下葉子同センター長が「このテーマ」を選んだ理由を述べ、講師を紹介。続いて、社会福祉法人心泉学園（児童養護施設）主任保育士の堀尾美幸講師が、同学園での日常に触れ、問題行動を取る子どもたちの背景をいかに大人が理解して寄り添い、安心を与えていくかの対応が大事であることを強調。「安心を得た子どもたちは力が抜けて、自分の言葉や行動をコントロールすることができるようになることを教えてくれたのは子どもたち」と語りました。

参加者に向けては、「子育てを省略化させる便利な商品開発が、親子のスキンシップを減らせ、愛着べースの脆弱化につながっているのではないかと問題提起」その他、専門職に求められる姿勢と支援など、深い内容が参加者の心を打ちました。

古市太郎講師（本学人間学部コミュニケーション社会学科助教）は、「学習支援」「子どもの貧困」「居場所づくり」「地域協働」をキーワードに講演。子どもの6人に一人が貧困と言われている今日、意欲がありながら経済的な事情で学習塾へ通えない子どもの学習支援と、学びにより貧困の連鎖を断ち切ることを目的として、「子どもたちの居場所」を兼ねたてらまっちを2013年に立ち上げました。

2015年には、生活困窮者自立支援法に則した文京区での学習支援の委託業務を受けました。さらに、子ども食堂との連携、同趣旨の団体への情報共有と交換、中間支援施設・フミコムを活かした活動を視野に活動を展開しています。古市講師は「学習支援と共に、子どもたちの日常での見えない部分を支える意義が『てらまっち』にはあると感じている」と話しました。

指定討論として、小栗後之運営委員が、園長を務めるふじみ野幼稚園を例に取り、「子ども主体で遊びから学ぶ自分を素直に表現できる場所と、それを受け止めてくれる先生の存在の大切さ」「心を動かして身に付けたものは忘れない、必要な時に知識となって現れる」と話し、幼児教育の真髄に触れました。

鳩山多加子教員研究員は、「人権教育」「今、私たちにできること」をキーワードに話しました。「氏名はかけがえのない個々を表すものなので、ニックネームではなく、敬称をつけた名前で呼ぶことが大事」「幼児虐待の早期発見のポイント」「保育者の専門性の中核は幼児理解」など、幼児教育関係者にとって必要不可欠な内容に、参加者一同、熱心に耳を傾けました。

司会は柄田愛教員研究員。椛島香代・加須屋裕子・須藤佐知子センター教員研究員ら関係者をはじめ地域の方々約50名が参加し、質疑応答が活発な公開研究会となりました。

大学 全国のソーシャルワーカーが本郷に集結！

コーディネーターを務める笹岡教授

「ソーシャルワーカーデー2018中央イベント」（主催＝日本ソーシャルワーカー連盟）が7月16日、本郷キャンパス仁愛ホールで開催され、全国からのソーシャルワーカー約200名が結集しました。タイトルは「AI時代のヒューマンワーク～ひらめく、輝くソーシャルワーカー」。

基調講演に「こと山本シュウさんが登壇。NHKEテレ「みんなのためのバリアフリー・バラエティーバリバラ」でメイン司会を務める他、諸団体の総合プロデューサー、大阪大学講師などを歴任。5年間にわたる小学校PTA会長としての経験も含めた涙あり笑いありのバワフルな講演に、参加者一同、圧倒される思いで聴き入りました。

リレートークでは、本学人間学部の笹岡眞司教授（日本医療社会福祉協会）がコーディネーターを務め、次の方々がそれぞれの活動について発表しました。

▼山田真紀子氏（日本精神保健福祉士協会、一般社団法人よりそいネット・おおさか大阪府地域生活定着支援センター）▼西田奨梧氏（日本医療社会福祉協会、オレンジホームケアクリニック）▼末水亜衣氏（日本ソーシャルワーカー協会、NPO法人ペピーマイル石巻）▼加藤慶氏（日本社会福祉士会、沖縄人学）

会場からは、感想・意見・質問が次々と寄せられ、活発なイベントとなりました。

レモンさんの熱い講演

大学 GCI生「きものやまと」で学ぶ

GCIフィールドワークの一環で、ロンドン、東京でキモノ・ショップを展開する「株式会社やまと」の協力を得た授業が4月13日から始まり、7月13日に最終回を迎えました。

店舗体験を楽しく報告

「きもの基礎知識・業界の現状」「着物試着練習・コーディネート」などについて講義を受けたGCI生たちは、それぞれ着物姿で「The YARD Shibuya Modi」「酒々井プレミアムアウトレット」などの店舗でインターンを体験。

最終日の成果報告会では、「隣に若者が集まるコーヒーショップがあるのに、なぜ店舗まで足が伸びないのか」「値札が見えない」「手の込んだ一品ものにも関わらず、外からはそれがわからない」「英語表記が少ない」などの疑問や課題を見つけ、解決の糸口を探りました。さらに、「外国人をターゲットにした着物を作る」「きものやまと×BGU着物ファッションショー」などを提案しました。

当日は、お世話になった「株式会社やまと」関係者が着物・羽織姿で参加。GCI生の発表に聴き入り、激励の言葉を贈りました。

大学 「全国学生対抗円ダービー」中間発表「第3位」！

円ダービー予測メンバー

「第18回全国学生対抗円ダービー」（主催＝日本経済新聞社）に、経営学部鈴木紫ゼミナール所属の3年生が2チームに分かれて参加し、何仲任さん、遠藤円香さん率いる「文京学院大学鈴木ゼミAチーム」が、中間発表において「第3位」に入賞しました。

Aチームは、鈴木魁人さん、小村佳奈美さん率いる「Bチーム」と協力し合い、それぞれ積極的に為替レートについて学習。両チームは、2018年6月末相場を5月末に1回目予測として提出。経済要因のみならず、米朝首脳会談の行方、トランプ政権の外交・貿易政策など、様々な政治要因が為替レートに影響を与えていたことから、ゼミ生たちの予測は困難を極めました。その中で、Aチームは「1ドル＝110円68銭」、Bチームは「1ドル＝107円73銭」と予測。実際の相場は「1ドル＝110円63銭」で、中間発表において「Aチームが「第3位」を射止めました。

大学 文京ギャラリー

KAWAGOE Wayfinding プロジェクト

2017年度より、本学とロンドン芸術大学（UAL）の連携教育プログラムの一環として継続している「KAWAGOE Wayfinding プロジェクト」が、7月30日～8月23日まで行われました。

これは「川越（埼玉県）の魅力を世界に発信する」ことを目的に、UAL生と本学の学生が協働で市内の実地調査・インタビューを行い、得た情報を基に作品制作を行うものです。

8月20日には同市の小江戸蔵里において、川合善明川越市長を来賓に、島田昌和理事長、工藤秀機学長、UALのCharles Abbott教授らが見守る中、教員による報告会と、UAL生による作品展示会を行いました。

街中で見た文様などをデザインした手拭い、折り紙の蝶からヒントを得たベンチ、七福神からヒントを得た旅券と、そこに押す判子、川越観光名所の「時の鐘」からヒントを得たワークショップ用の布鐘楼、革と川越唐桟で作ったソーラーパネル搭載のカバンなど個性溢れる作品が展示され、UAL生が来場者に向けて熱心に説明しました。

UAL生と協働した本学の学生は次のように話し、共に成果を喜びました。

★森瑛絵（経営学部2年）「川越唐桟がもっと身近になるような手伝いをしたいと思って参加しました。UAL生の発想の豊かさに驚き、勉強になりました」

★植松柚衣（心理学科2年・GCI生）「自分の英語力を上達させたくて参加しました。UAL生と友だちになることがサポートの一つと考えて、一緒に楽しく過ごしました」

★大城優理（心理学科2年）「英語は話せませんが、芸術に興味があって参加しました。作業の準備や街歩きの案内などのサポートを通して、UAL生とコミュニケーションができ、留学している気持ちになりました」

高校 理数コース生徒がタイで研究発表

次期学習指導要領の中で重要な柱となっている探究型学習。本校は平成24年度から6年間文部科学省よりスーパーサイエンスハイスクールの指定を受けて、カリキュラム開発に取り組み、現在はコース制の中で探究活動を実践しています。

今回は、科学交流を深めているタイの高校との活動について雨宮正典副校長に話を聞きました。

タイのプリンセス・チュラポーン科学高校ペッチャブリ校との科学交流も6年目。互いの学校でのサイエンスフェアも5回ずつの実施を数えるまでになり、今年4月のサイエンスフェアにも、タイから12名の生徒と4名の教員が来校。本校生徒は、大学教授によるサイエンスプロジェクトや口頭・ポスター発表などを通して科学交流を深めました。

6月には、3回目の実施となるタイ教育省主催のTJ-SSF2018(Thailand-Japan Student Science Fair)がプリンセス・チュラポーン科学高校ピサヌローク校にて行われ、タイと日本の高校生および高専生約350名が一堂に会して自らの研究を発表しあい、科学に関する経験を共有しました。本校からは、高校3年生の4名が学校代表として参加しました。

大会初日には、大会会場にシリントーン王女をお迎えして開会式が行われました。講堂で基調講演や代表生徒による口頭発表が行われ、王女へのポスター発表会場では、選出された30名の生徒が緊張した面持ちでポスター発表を行いました。王女は、メモを取りながら熱心に発表に耳を傾けてくださいました。本校からも1名の生徒が選ばれて、緊張しながらもしっかりと発表を行っていました。

7日～9日の期間中に、本校の参加生徒4名はそれぞれのセッションで口頭発表やポスター発表を行いました。ポスターセッションでは、多くの生徒や先生方が人だかりとなって熱心に発表を聞き、質問やアドバイスをする姿がありました。

数学・物理・生物・科学・ロボット工学の各講座を順番に巡るScience Rally、物理学のレクチャー、タイの伝統的な体操、薬草園でのフィールドワークとその後のプレゼンテーションなど、充実したプログラムを協働しながら体験できました。

交流パーティーでは本校生徒は全員浴衣で、他校生徒も工夫を凝らした日本的衣装で参加。タイの生徒も多くの生徒が民族衣装や踊りの衣装を身にまとい、歌やダンスを楽しみながら文化交流を行いました。最後は長い時間別れを惜しみ、再会を約束しました。

参加生徒からは次の感想がありました。

「高2のタイ研修で、生まれて初めて英語でのプレゼンテーションをしましたが、どこか悔いの残るものでした。そのため今回のTJ-SSFに応募し、力を入れて準備を行いました。王女の前での発表は不安や緊張もありましたが、練習の成果をしっかりと出すことができたため、達成感を強く感じることができました。科学を通してタイの方たちと国際的な交流ができたことは、とても貴重な体験となりました。タイとの交流は、今後も後輩たちに引き継いでほしいと思います」

タイの生徒とプレゼンテーション資料を作成

本校のポスターセッションに人だかり

高校 SGHアソシエイト「海の日INSPIRE2018」で大学生と協働

本校が文科省から指定を受けているSGH（スーパーグローバルハイスクール）アソシエイトの一環で、生徒たちは校内外の専門家による指導を受けながら、日々探究活動に勤しんでいます。

7月16日、東京海洋大学グローバル教育研究推進機構の小松俊明教授が主催する高大連携ワークショップ「海の日INSPIRE2018」が同大学で実施され、本校国際教養コースの生徒たちが参加しました。

これは、高校生と大学生が協力し、身近なグローバル化問題について解決策を検討していく学びの場です。今年は『グローバル化がもたらす日本社会への影響を考える』というテーマの下、栃木県立佐野、千葉県立成田国際、同八千代、松戸市立松戸の各高等学校と本校生徒が、東京海洋大学の学生と共に課題に取り組みました。

本校生徒は常日頃、小松教授から「アジア研究」について指導を受け、学びを深めています。

当日はまず、行政書士の金子三佳子先生から「日本がグローバル化により内包するようになった外国人労働者について」の講義を受け、次の課題が与えられました。

●18歳を過ぎた外国人の子どもが、日本で自立した生活を営むことが可能になるような対策を考える。

●外国人の子どもが、早期に日本の教育を受けるに当たり、どのような問題があるかを考え、それらの問題を解決するために有効と思われる法や社会の仕組みを考える。

これらに対して、各高等学校の生徒は分散してチームを作り、東京海洋大学の学生と共に約3時間議論して、各自の考えを発表。全員の発表を聴き、参加者全員が良かったチーム2つに投票した結果、本校1年生の生徒、八千代高等学校の生徒、東京海洋大学の学生と一緒に取り組んだチームが最も票を集めました。

どのチームも、この難しい問題に対して、それぞれが異なる視点から解決策を見出そうと悪戦苦闘。初対面のメンバーと共に、高度な内容をまとめる作業はかなり大変でしたが、本校の日頃の探究活動への取り組みの成果が確実に現れたワークショップとなりました。

他校生徒・大学生と共にプレゼンする本校生徒

東京海洋大学の学生と3時間の議論

大学「日本道徳教育学会」盛大に

外国語学部の小泉博明学部長・教授が大会委員長を務める「日本道徳教育学会第91回大会／平成30年度春季大会」が、6月30日と7月1日に本郷キャンパスで開催されました。大会テーマは「『特別の教科 道徳』における評価を考える～主体的・対話的で深い学びによる成長に向けて～」。

初日、仁愛ホールで行われた開催行事では、大会開催校として櫻井隆副学長・経営学部教授、続いて、日本道徳教育学会の押谷由夫会長（武庫川女子大学教育研究所 大学院臨床教育学研究科教授）と、大会運営委員長の小泉学部長が挨拶しました。

基調講演は「『特別の教科 道徳』の全面実施を迎えて」を演題に、文部科学省・国立教育政策研究所の浅見哲也調査官が担当。教育講演は「教師になったオール1の落ちこぼれ 評価を語る」を演題に、作家で元高校教師の宮本延春氏が担当しました。

2日目、14分科会に分散して行われた自由研究発表は、帝京大学、國學院大学はじめ全国からの大学教授らによる司会で進行。小学校、中学校、大学の教員らが研究成果を発表後、参加者から意見・質問・提案などが飛び交い、会場は熱気に包まれました。

シンポジウムでは、「『特別の教科 道徳』における評価を考える」をテーマに、柴原弘志教授（京都産業大学）のコーディネートのもと、以下のシンポジストが熱い議論を戦わせました。▼澤田浩一氏（文部科学省・国立教育政策研究所調査官）▼大舘昭彦氏（千葉県教育庁）▼木下美紀教諭（福岡県新宮町立新宮北小学校）▼鈴木賢一教諭（愛知県あま市立七宝小学校、前愛知県愛西市立八開中学校）

準備から運営を小泉学部長と、本郷教職課程センターが行い、両日、教職履修生15名が、小・中学校の教員29名と共に受付・会場案内等をサポート。参加者総数525名の大会は、大きな成果をもって無事に終了しました。

分科会で研究発表

シンポジウムで熱い議論

大学 ブレーメンズが「根浜海岸海あそび」をサポート

2011年3月11日に発生した東日本大震災で被災し、砂浜が減少してしまった根浜海水浴場（岩手県釜石市）。震災後には、トライアスロン大会の前身としてオープンスイミング大会、希望郷いわて国体の公式種目としてのオープンウォータースイミング大会、釜石はまゆりトライアスロン国際大会を実施し、地域住民や関係団体が「根浜海水浴場の復興」に向けて積極的な活動を継続してきました。

今年7月28・29日、同海岸で行われた「2018夏 根浜海岸 海あそび」に、本学のブレーメンズが参加。根浜緑地公園のテントサイトにブースを構え、ブレーメンズオリジナルの「ねば～だるま」はじめチャリティグッズを販売しました。

「漁船による漁業体験見学ツアー」「シュノーケリング」「レスキューボート」など7つの体験プログラムのひとつとして、ブレーメンズは「ねば～だるま」絵つけワークショップ、ボディペイント体験などを行い、参加した子どもたちは明るい笑顔を見せました。

ブレーメンズは、東日本大震災を機に本学コンテンツ多言語知財化センターが「復興支援プロジェクト」として立ち上げ、所属の学生たちが考案したチャリティグッズを各地で販売。全収益金を被災地に贈る活動や、各種ワークショップを行い、復興支援に尽力しています。

根浜海水浴場の復興を願う参加者

ブレーメンズが手掛けた「ねば～だるま」